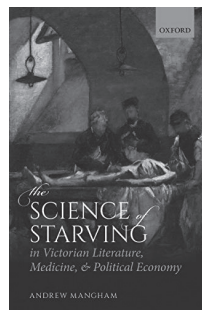


書 評

Andrew Mangham, *The Science of Starving in Victorian Literature, Medicine, & Political Economy*

(Oxford University Press, 2020)

唐戸 信嘉



著者アンドリュー・マンガムはレディング大学で教鞭をとる、ヴィクトリア朝文学——とりわけセンセーション・ノベル——を専門とする研究者である。本書は彼が2020年に発表した最新の論考で、ヴィクトリア朝時代の「飢え」(starving)の表象を主として三人の作家、チャールズ・キングズリー、エリザベス・ギaskell、チャールズ・ディケンズのテキストを通して分析し、前時代とくらべて「飢え」の解釈がどのように変遷したかを跡づけた研究である。十九世紀初頭はマルサス経済学の影響により、「飢え」は必要悪であった。社会全体からみれば餓死もまた人口の調整弁と見なされ、神の摂理とする解釈が主流をなしていた。だがこうした見方は、生理学などの発達とともに十九世紀中盤にかけて修正されてゆく。マンガムは、キングズリー、ギaskell、ディケンズらの社会小説に見られる「飢え」の表象が、「飢え」の新しい認識を生み出したという。彼らは「飢え」という現象を写實的に、冷徹な眼差しで描き出すことで、読者の同情を惹起し、それは必要悪などでは決してなく、社会の努力によって改善すべき課題であることを訴えたのである。

マンガムはまずイントロダクションで、生理学の分野における胃の研究史を紹介している。生理学は、生命現象を機械的プロセスと見なし、生命現象の物質主義的な再解釈を試み、その過程において胃の機能の研究も本格的に開始される。マンガムの報告によれば、胃の消化の働きについては直接的な観察がきわめて難しく、人体の「未知の領域」として長らく神秘的なヴェールに包まれていたという。大きな飛躍は、アメリカの医者であったウィリアム・ボーモントが、銃の暴発事故により腹部に傷を負ったカナ

ダ人を対象に行った消化機能の実験によってもたらされた。このカナダ人は腹部の傷が完全にはふさがらず、その開口部を通じてポーモントは胃における消化の働きをつぶさに観察することができた。それにより胃液の働きや飢えが起るメカニズムも判明したのである。こうして「飢え」という現象に対して生理学的な説明がはじめてなされ、神の摂理という乱暴な解釈に代わり、人道主義的観点からの「飢え」の理解が進むことになった。

もっとも、生理学の発見がすぐさま社会の「飢え」の理解を一転させたわけではなく、アイルランドのジャガイモ飢饉などに際しては、依然として「神の摂理」とする意見がイギリス国内において横行した。マルサスが自らの人口理論を説明するときに持ち出した「神の御心」はかなり尾を引いたわけである。それはハーバート・スペンサーによる適者生存の思想まで流れこんでおり、十九世紀を通じて「飢え」の解釈は、神による運命論と、人道主義的な解釈とがぶつかり合い火花を散らす、主戦場のひとつとなったのである。第一章では、マルサス流の思想の批判者として——つまり飢えを反自然的な現象と見なした論者として——ウィリアム・コベット、ロバート・サウジー、トマス・カーライルの意見も引用しつつ、飢えや飢饉に関する科学者の論争（たとえば医学者であったウィリアム・ファーと社会改良家エドウィン・チャドウィックの論争）を紹介し、飢えの解釈がいかに政治的な問題をはらんでいたかが示唆される。レッセフェール主義の保守思想と、人間の不幸と苦しみを内側から理解しようとする近代ヒューマンイズムの対比が、「飢え」に関する人々のコメントの裏に浮かび上がる様子は読んでいて圧巻である。

第二章はキングズリーのテキスト——特に『オールトン・ロック』、『酵母』、そして『二年前』——がもっぱら分析される。マンガムはそこにキングズリーのマルサス主義への反論、貧困は社会が生み出すもので飢えも同様であり、自然の厳しい秩序があるとしても、人間はそれに対して科学の力で対処するべきである、というメッセージを読み取る。キングズリーはキリスト教社会主義者であり、資本主義経済がもたらす貧困や格差、悪しき労働環境といった問題を、聖職者が向き合うべき重要な課題として鋭く認識していた。貧困は決して個人の責任に帰すべき問題ではなく、社会の責任であると彼は考える。教会がしばしばブルジョワジーの理論に共鳴し

てきた事実を鑑みるならば、キングズリーのこうした立場は当時としてはかなりラディカルといえよう。

第三章ではギヤスケルに焦点が当てられ、『メアリー・バートン』、『北と南』、そして『シルヴィアの恋人たち』のような産業社会と労働者問題を主題化した作品が検討される。経済格差が深刻な問題となり、労働者階級が切実な問題として貧困や飢餓と向き合う一方、中流以上の人々はそうした事実による無知という隔絶された社会状況こそがヴィクトリア朝時代の実相であった。そうした状況にあつて、ギヤスケルの社会小説がいかにインパクトをもったかを著者は強調しつつ、ギヤスケルのテキストが——彼女の友人であったウィリアム・ハウィットや、『イングランドにおける労働者階級の状況』を記したフリードリッヒ・エンゲルスの主張とも共鳴しつつ——貧困や飢えの問題は明らかに人災だと告発していると述べる。そして、ギヤスケルの社会小説は労働者たちの物質的な救済の先に社会全体のモラルの改善を見据え、貧困問題も社会のモラルの問題も社会全体の責任であるとし、労働者たちの自己責任論を一蹴しているところに優れた価値があると結んでいる。

第四章はディケンズの『ハード・タイムズ』や『オリバー・ツイスト』を祖上にのせる。まず、ディケンズが大きな関心を寄せた、バーソロミュー・ドラウエット (Bartholomew Drouet) なる人物が有罪判決を受けた事件が紹介される。ドラウエットは青少年の保護施設を経営していた人物で、不衛生な蛸部屋に子供たちを押しこみ、満腹に食事もやらず、大勢の青少年をネグレクトにより死にいたらしめた罪で有罪となった人物だ。ディケンズは『オリバー・ツイスト』に登場するマン夫人の施設を、こうした事件に取材して描いている。ディケンズは慈善事業にも携わり、娼婦の社会復帰を援助する施設などに共同出資していたこともあり、マルサス流の無為無策主義にはきわめて批判的だった。新救貧法の成立を一貫して糾弾したディケンズにもっとも確かな根拠を提供したのは、飢えに関する生理学的知識だったことを、マンガムは当時の資料で跡づけながら論じている。

最後に「結論」においてマンガムは、ヴィクトリア朝における貧困や飢えに対する自己責任論が、現代イギリス社会においてさえ完全に根絶されたわけではないと述べ、それらに対する偏見は過去の産物ではなく依然とし

て現代的なアクチュアルな問題であるとつづける。近年のネオリベラリズムと緊縮財政下におけるイギリス社会には、ヴィクトリア朝を席卷していた保守思想の亡霊が見える。ヴィクトリア朝期におけるマルサス主義をめぐる論争は、現代においても決して新鮮さを失ってはならず、現代社会の諸問題を考える上でも重要なヒントを得るきっかけになるのではないか。マンガムは本書をそのように結んでいる。

以上が本書の概要である。全体として、文学テキストのみならず、医学や生理学分野のエッセイや論文、記事などを広く渉猟した上で展開される議論は緻密であり、文化史研究としても興味深く、読みがいのある内容になっている。文学の研究者ばかりでなく、イギリスにおける政治、経済、医学の歴史に関心を有する多くの人々に優れた示唆を与える研究書であると思う。ただその一方、いくつかの問題も目についたので、僭越ながら最後に指摘しておきたい。

本書の分量はおよそ二百ページであり、研究書としては比較的小ぶりの部類に入るが、各章においてもっと頁を費やし、もっとその先の議論が聞きたいと思うことしきりだった。特に第二章から第四章の、作家たちを個別に取り上げた章においてそうで、たとえばすでに述べたように第二章ではキングズグリーが論じられるが、キングズグリーはマルサス主義に反論しているにもかかわらず、後年にはマルサス主義の後継ともいえるスペンサーの適者生存の論を受け入れているのである。この矛盾についてマンガムの説明はない。キングズグリーとマルサス主義の関係に言及するのであれば、その矛盾をどう解釈するか、後年になってキングズグリーは反マルサス主義者であることをやめたのかどうか、さらなる議論を展開してほしい。ギaskellやディケンズを論じた章でも、どちらかといえば引用される文学テキストの分析は少なく、背景となる医学や生理学、貧困にまつわる記事の解析に力点が置かれている。章のタイトルはそのまま作家の名前になっているので、少々アンバランスな印象を拭い切れない。

二番目の問題として、著者が本書で頻繁に用いる「物質性」(materiality)というキーワードを挙げたい。マンガムはこの言葉の後ろに「飢え」や「貧困」などを入れて、「飢えの物質性」、「貧困の物質性」のように用いるのであるが、各章においてこのキーワードに頼りすぎているため、それ以上論

が先に進まないというジレンマが生じている。各章の論に一貫性を与えるためであろうが、さまざまなテキストの解釈をひとつの概念に落としこむことで、論が横滑りし、先細りしているようにさえ思われる。一番目の問題としてあげた、文学テキストの分析が少ない理由も、“materiality”の論証だけが目的になってしまっているからではないか。そのように邪推してしまう。

最後に、隣接する研究との連携の弱さについても——やや欲張りな希望と承知しつつも——物足りない印象を抱いたことを告白する。貧困や飢餓に対する古典的な自業自得論は、他者への共感の欠如の問題としても捉えることができるが、動物の痛みなどに対するイギリス社会の反応は早く、動物愛護の姿勢は十九世紀もかなり早い時期から発達した事実はアメリカの歴史家ジェイムズ・ターナーの *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind* (1980) が明らかにしている通りである。動物の苦しみに対してそれほど敏感に反応した人々が、同じ人間の苦しみに鈍感であったのはなぜなのか。ヒューマニズムと共感の感情史という切り口からも、本書の主題はさらに掘り下げられる余地を残していると思われる。

—茨城キリスト教大学准教授